



GLOBAL INFO

公益財団法人 豊田市国際交流協会情報誌

No. **28**
特別号

豊田市国際交流協会設立25周年を迎えて

(公財) 豊田市国際交流協会理事長 **豊田 彬子**

(公財) 豊田市国際交流協会は、1988年10月1日に設立し、本年、25周年の節目の年を迎えることができました。これもひとえに、本協会をお支えくださる皆様の深いご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。これを機に、改めて「国際化の主役は市民である」という原点に立ち返り、気持ちを新たにして皆様と手を携えて次への一步を踏み出したいと思っております。

この25年の間に、豊田市における国際交流や多文化共生を取り巻く情勢は大きく変化を遂げました。1990年代には入管法の改正により外国人住民が保見地区を中心に増加し、様々な課題を抱えました。その際には、NPOの皆さんと連携しながら多文化共生に向けた取り組みを行い、また、各地区の区長さん方のご尽力で外国人を受け入れられる土壌が育まれるなど、国際化に向けて大きく成長したと思っています。さらに、2002年12月にはブラジルの様子を実際に肌で感じるために「ブラジルスタディーツアー」を企画し、その後の課題解決に大きな効果をあげました。学校における「ことばの教室」や日本語指導員の充実、2008年の「とよた日本語学習支援システム」の構築、2009年1月には経済情勢の悪化を受けて直ちに緊急日本語講座を開講するなど、ボランティアの開催する日本語教室と併せて、日本語習得の機会をさらに充実させることにつながりました。

TIAでは、ボランティアとスタッフがみんな同じ思いを持って豊田市の国際化のために努力しております。現在、日本語教室や日本文化紹介など12グループ、約300人のボランティアが登録し活動して下さっていますが、ボランティアの皆様の日々のお働きには本当に頭が下がり、心から感

謝しております。私自身も信念と情熱を常に持ち続け、大小様々な感動を明日への原動力として日々努力に心掛けてまいります。

豊田市の第7次総合計画にも盛り込まれた「世界に開かれた国際都市豊田」として、日本人も外国人も誰もが快適に暮らせるようにすることがTIAに求められていると

思います。そのためには文化や習慣、考え方など自分との違いを理解し、受け入れることのできる環境を作ることが大切であり、TIAの役割と考えています。例えば海外の国々を訪れたとき、その国の美しい景色ももちろん記憶に残るでしょうが、それ以上に現地の人々のあたたかさを感じたとき、素敵南国だな、また来てみたいなど心から思えるのではないのでしょうか。お互いの違いを尊重できる人たちがいっぱいであたたかい豊田市でありたいと思います。これまでの「外国人のために」から「外国人と共に」住みよいまちづくり、世界に開かれた国際都市を目指していくことを最も重要な目的として、TIAのすべての事業に反映させてまいりたいと思います。これからもいろいろな皆様のご指導をいただきながら頑張ってまいりますので、一層のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。



TIA設立25周年記念誌ができました

設立25周年を記念し、また、設立から今日までの25年の間、TIAと共に歩み、支えていただいた皆様への感謝の思いを形にしたいと、25年間の歩みを記した記念誌を発行しました。



記念誌をご希望の方は、数に限りがありますので、お早めにTIA事務局へお問い合わせください。

賛助会員としてTIAを支えてください!

TIAでは平成23年4月の公益財団法人への移行に伴い、賛助会員制度をスタートさせました。賛助会員とは、個人又は団体・法人単位で賛助会費をお支払いただくことでTIAを支援して下さる皆様のことです。制度開始から2年、多くの個人会員、団体・法人会員の皆様にご支援いただいております。

賛助会員として、日本語教室等のTIA事業への側面支援を、ぜひお願いいたします。

○賛助会費 年会費：個人会員 一口 1,000円

法人・団体会員 一口 10,000円

○会員の方へは当機関誌をはじめ協会事業や国際交流に関する情報を随時お送りします。

皆様のご支援お待ちしております。

TIA設立25周年記念講演会講演録
世界に開かれた国際都市をめざして
～今、私たちに求められていること～
トヨタ自動車株式会社 名誉会長 張 富士夫氏



ただいま、ご紹介にあずかりましたトヨタ自動車の張でございます。

本日は25周年、誠におめでとうございます。また、このおめでたい席にお呼びくださいませ大変光栄に存じます。これより1時間、一所懸命、今までの経験に基づいて、思うことをお話し申し上げたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

初めに、先程、副市長さんからオリンピックの話も出ましたけど、実はこれがブエノスアイレスに着て行ったユニフォームでございます。ネクタイは体育協会のものです。全員この格好で、このワイシャツ、この背広で行きましたので、テレビでご覧になって、「みんな同じ色の服を着てたな」とお思いでしょう。日本に戻ってまいりまして初めて皆様方に御紹介しようと着てまいりました。あんまり私には似合わないかもしれませんけれども。

豊田市から見ると、このTIAができて25周年ということでございますが、私自身は同じ25年前、ちょうど部長になりたてぐらいの時に、「現地責任者としてケンタッキーへ行きなさい」と、いきなり指名がございました。考える時間も無く、年末に言われて1月6日に行きました。それが25年前ぐらいでございます。考えますと、やはり、それがトヨタ自動車のグローバル化のほぼスタートだったのではないのでしょうか。

当時は、その2年前に、GMと合併会社をカリフォルニア

に作りまして、そこで日米両方で勉強をしながら事業を始めました。トヨタ自動車として100%資本を出して、100%トヨタ自動車でやるというのは、ケンタッキーとカナダ、この二つが初めてだったわけで、それが大体25年前ぐらいでございます。

それからアメリカに行って、私自身は、大体10年近くいたものですから、このTIAが同時に豊田市にできているということは帰ってきてから初めて知ったわけでございます。私は、外にばかり出ていたわけですが、中でこのようにがっちり国際化、グローバル化を進めていただいているということは本当に素晴らしいことだと思っております。公平に、内外のバランスがとれるということがすごく国際化にとっては大事なことでございます。

それから私としては、一豊田市民として大変誇りに思う組織だと思っております。日本の中にたくさんの市町村があると思えますけれども、これだけ外にも中にも国際化を進めているところは、多分ないんじゃないか、そういう意味で、豊田市に住んでいることを大変誇りに思っているわけでございます。

本日は、古い話ですけども、私がアメリカに赴任した折に経験したことを少々お話し申し上げて、その後で自分の考えていること一いかにこういう国際交流が大事か一ということについて、お話を申し上げたいのでどうぞよろしくお願いいたします。

20年ぐらい前だったと思いますが、ドラッカーさんという方が日本にいらっしゃって、国際化についてお話をなさいました。その中に、「日本の国際企業というのはどんなところだと思いますか」という質問で、東芝さんともう一つ、どこかの名前を挙げておられました。新聞記者が「トヨタ自動車はどうですか」と聞いたところ、ドラッカーさんが「トヨタ自動車は国際企業どころか日本の企業でもない。あれは愛知県の企業だ」と書いてあったんです。当時、トヨタ自動車の社長は豊田章一郎さんでした。その社長に、私が出張で日本に戻っていた時、「ちょっと来なさい」と呼ばれまして、「なぜドラッカーさんはこんなことを言ったんだ。君はドラッカーさんのところへ行って聞いて来なさい」と言われました。

とはいえ、ドラッカーさんが大体どこに住んでいらっしゃるかもわかりませんでした。しかし、アメリカっていい国だ

など思ったのは、私がケンタッキーへ帰って、すぐアメリカ人にドラッカーさんに会えないだろうか相談したら、2、3日後に、時間が取れたと連絡が入りました。ドラッカーさんは、当時、カリフォルニアにいて、ロサンゼルスよりちょっと中に入った場所にある大学にいらっしゃいました。そこまで会いに行きまして、「どうしてトヨタ自動車は、国際化がだめなんですか。どういうふうに考えればいいんですか」と尋ねましたら、色々な事例でお話をいただきました。そうしたら、「要は、人です。組織じゃありません」と言われるんです。「トヨタ自動車が海外でものをつくっているから、国際化を果たしたということではない。本社の組織が〇〇海外部をいくつ作ったって、そんなものは国際化じゃないです。問題は人ですよ。折角、一所懸命、国際化と言っても、アメリカだったらアメリカ人と一緒に仕事をして、そして、日本では、そのような海外で色々な知識や経験を持って帰国した人たちを、トヨタは使っていないんじゃないですか」と言われたのです。よく知ってるなと思いました。

その当時、僕らの先輩というのは、大体55歳までアメリカで働いていらっしゃいます。帰国すると、今まで日本で勤めていた会社から移り、違う畑でお勤めをされていました。それをまた全部ドラッカーさんは知っているわけです。それで、「それじゃだめだ。国際化は人である。経験豊富な人たちをどういうふうに活かすかということが会社にとって大事なんだ」と教えてもらって、帰国してから社長に報告したのを覚えています。もう今から20年前ぐらい前の話です。

それから見ますと、今は、トヨタ自動車も、たくさん海外で事業をやって、そこで活躍した人が、帰ってきてから国内で知識や経験を活かしつつやっています。ですから、今はもう国際企業になったんじゃないかと思います。ドラッカーさんは、大分前に亡くなられましたけども、もし生きていらっしゃったら今度は豊田市の活躍ぶりを、「どうですか。国際化でしょ」と言ってみたいなというような気持ちでございませう。

25、6年前にトヨタ自動車が海外で事業を始めましたということをお知らせしましたが、25年経って、今どうなっているかということをご報告します。海外では、ただいま現在、170か国で販売をしております。それから、27か国の55か所ぐらいで生産をしております。最初、25年前たった一つ、それ後のカナダで二つだけだったのですが、それから大きく広がって行って、この25年間に生産事業所が55か所になっています。ロシアの東方やエジプトなどでも手始めに小さな事業所をやり始めていますから、さらに増えてくと思います。

今、トヨタ自動車から、海外に駐在している人が2,150人です。私が最初にケンタッキーに行った時に一緒に行ってくれた人が60人、60家族でございました。ですから、それから比べるとこれだけ増えてきたということで、この25年間で海外でも事業が随分広がりました。大勢の人が行って、その人たちが3年、5年と勤めて、また多くの方がここに異動になって、豊田市に帰ってこられる。ですから、海外経験を

した人がどんどん市内でも増えていくし、またご家族、特にお子さんも海外で学校に行ってまたこちらへ戻ってきています。

そういうことで、海外経験を積んでどんどん豊田市に帰ってきているし、こちらでは豊田市国際交流協会さんが積極的に海外からいらっしゃる方に対して手を差し伸べて、友好事業をやっていただいているということでは、どんどん動きが進んでいくだろうなというのを、私は大変うれしく思っております。

先日のオリンピック開催地決定の時に「おもてなし」という言葉を滝川クリステルさんが言ったものですから、大分今、おもてなし、おもてなしって言っているんですけど、これはもう25年前から豊田市はおやりになっておられます。やはり、海外へ出ていくこともグローバル化ですけれども、海外からお迎えするほうもグローバル化だということは間違いないこととございまして、皆様方のご活躍・ご活動が今後ますます大切になると思います。トヨタ自動車も一所懸命これから外で事業を拡大していくと思います。生意気なようですが、「我々の育った豊田市では、やはり同じように国際化がどんどん進んでいるんだ、皆さんいらっしゃい」ということが、後顧の憂いなく言えると思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

少し、私がアメリカで経験したことについて思い出しながらお話をしてみたいと思います。このパンフレットを見ますと、私は覚えてなかったんですが、2001年の7月にこちらの協会でお話し申し上げていますね。そうすると、アメリカから帰国してから6年、だからまだ新鮮なところで色々なことをお話ししたんじゃないでしょうか。その時にお聞きになって覚えていらっしゃる方、おられないとは思いますが、ちょっと一部話がダブるかもしれませんが、別なお話も申し上げます。

25年前、アメリカに赴任したと言っても、西も東もわかりませんし、何もなくてから、まずは英語を話せる部下と2人で行きました。法律事務所の一角を借りて、そこでやらなければいけないこと、例えばフォーリン・トレード・ゾーンとって日本から来る部品に税金を掛けない、車になってから税金をかけるというものがございませう。部品として税金がかかると何十パーセントと関税がかかりますが、車になると2.5%ということですので、日本から来る部品には全部車になってから税金をかけてくださいという制度があるんですが、そういうものをお願いするためにワシントンへ行くということが、最初の仕事でございました。事務所も何もなくてから、ケンタッキー州レキシントンの法律事務所の一角に机を借りてやりました。そして、アメリカに行って、3日目にジョージタウンという、我々がこれから工場をつくるころの郡長さんと市長さんと、その他大勢の方がいらっしゃって、食事会を催していただきました。まだ、足も踏み入れてなかったし、英語も話せない、部下が話せるからそう心配しなかったんですが、そんな時に、ジョージタウンの仲間たちが来てくれました。本当に親切で、もう昔から

の友達のように扱っていただいたので、私は大変感激をしました。

赴任する前、日米貿易摩擦がひどかったんです。覚えている方もいらっしゃるかもしれませんが、日本が急激に輸出をしていった頃です。それで、アメリカは失業者が増えてきたということもあって、労働組合が日本の車をみんなでたたき壊すようなシーンが出てきて、その写真がまた日本の新聞にたくさん出たりなんかして、ちょっと怖いところだなという感じで行ったわけです。けれども、行ったら、現地の皆さんは本当に優しく、温かく迎えていただいて、ほっとしたんです。そういうことを覚えております。

それで、レキシントンという町は、ケンタッキー第2の都会でございまして、といっても人数はせいぜい30万人ぐらいだったと思います。それに対しまして、北側にジョージタウンという町があって、ここは1万人いないぐらいの、土地は広いんですけども、非常に人口が少ない静かな町です。それで、ここに工場をつくるということになりました。

私は、法律事務所の人に本当にお世話になったから、弁護士3人を呼んで、晩御飯食べる時にちょっと聞いてみたんです。「僕はジョージタウンに住むべきか、レキシントンに住むべきか」と。そうしたら、2人の弁護士が、「レキシントンに住むに決まっている。レキシントンだと都会の機能が全部あるし、大体住宅をどこにするのかというのは個人の問題。会社と全く関係ないから、だからレキシントンに住めばいい。考えることでもない」と言われたんです。

なぜ、私がそんなことを質問したかということ、昔、私は土地買収をトヨタ自動車で行っておりまして、豊田市にもその頃、大変お世話になりました。高岡工場の土地買収は一応自分も担当してやりましたが、あそこはご存じの方もいらっしゃるでしょうけど、旧高岡町が大部分、東の方が三好町、西の方が刈谷市なんですね。その3市町村がちょうどまたがっているところに高岡工場ができたわけです。そういうことがありまして、三好町の町会議員さんたちと本当に親しくさせていただいて、そのころからトヨタ自動車と三好町との大変親しい交流が始まりました。その時に三好町の町会議員の方が、「こうやってトヨタ自動車と三好町が大変親しく色々やっていくというのは、本当に三好町の人にとってもうれしいんだけど、一つ残念なことがある」と言われました。それは、トヨタ自動車の課長以上の役職者が三好町に住んでくれない、それが残念と言われて、ああ、そういうものかなと思ったわけですね。その後、どんどん工場ができてまいりましたから、今はそんなことはもちろんないんですが、その時にはそういうふうに行われたので、課長以上がいいかどうかわからないけど、やはり、地元に住むということは大事なんだというのが頭の片隅にあったもので、ジョージタウンに住むべきかどうかということを知ったんです。

それで、アメリカでは、レキシントンに住むべきと言われて、その時はそういう話で、帰ってきましたが、3、4日たったら、ジョージタウンのニュース&タイムズという地元の新聞の編集長から、「ジョージタウンに住みたがっていると聞きまし

た。大歓迎です」と来ちゃったんですね。「えっ」と思ったんですが、どうも後で聞いたら、何も言わなかった3人目の弁護士さんが、ジョージタウンニュース&タイムズの編集長と仲がよくて、どうも「ミスター張はジョージタウンに住みたがっている」って言ってしまったので、新聞の編集長ですから、もうジョージタウンの人に色々話をして、You're welcomeだという手紙が来たんです。だからもう、私は家内に、「すごい田舎だけど我慢してくれ」と言って、ジョージタウンに住みました。大きな家がなかったの、ジョージタウンのアパートでいいと言ったら、「それは絶対いけないよ」と言われたんです。それは、一緒に行っていて、よくアメリカを知っているトヨタの日本人の人でしたが、「社長がそんなところに住むのは美徳じゃない」と言われて、大体1回に150人ぐらいお客様をお招きできるぐらいの家に住まないといけない。そんなものはなかったの、「では、仕方ない。つくりましょう」ということになりまして、会社に申請して、それで家をつくりました。日本と比べれば、割が良く、土地を含めて、40万ドルぐらいだったですかね。2,000坪ぐらいのところに150人ぐらいの方が来られるような大きな屋敷をつくりました。

それで、家内が少し遅れてアメリカに来まして、家ができて、入居した初日に電話がかかってきました。何だろうなと思ったら、「よく来た。今から行くから待っててくれ。」という感じのおばあちゃんの声でした。何かあるのかな、色々な申請しなきゃいけないのかなと思ったら、大きな車に、もう80歳ぐらいのおばあちゃんが運転して来まして、「ここに家を建てて、あなたが住むのは大歓迎。これはウエルカムワゴンだ」と言うんですね。それで、中からいっぱい色々な物を持って来てくれて。そこには、病院はここ、買い物はここ、学校はここ、こういうものを全部パンフレットに電話番号が書いてあって、それに鉛筆が1本添えてあるようなものを、一つずつくれるわけですよ。僕はびっくりしました。こんな新参者で、しかもGMとかフォードの敵みたいなトヨタの人間だけれども、こんなに最初から親切にさせていただけるのかと思って、とても印象深かったんです。それでそのおばあちゃんは言うだけ行って帰ってしまったんです。

その後も、ご近所の方に本当に親切にさせていただきました。最初は、少々覚悟していたんです。これだけ日米の貿易摩擦が激しい、戦争だなんて言われていたわけですから相当厳しい目に遭うだろうと思っていました。しかし、全くそんなことはなくて、むしろ本当に仲よくしていただいたと思います。

私だけじゃなくて60家族、みんな同じでした。その一つの原因は、私がアメリカに行く前に当時の社長の豊田章一郎さん挨拶に行きましたら、「日本人は群れるというこ



とをよく言われるので、君、すまんけど、60家族みんなばらばらに住んでくれ」と言われ、私は「わかりました」と答えたからです。私自身はジョージタウンに住みましたが、後の人たちもみんなばらばらになって、まとめて住まないようにしたんです。だから、みんなアメリカ人の中に1家族ずつ入っていく。周りが全部、前も後ろも横もみんなアメリカの方です。そうしたら、本当に親切に、どの家族も扱っていただき、最初は心配していましたが、もう1か月、2か月経ったら、みんな安心して、大変いい生活ができたと思っております。

色々なことがありましたが、やはり一番の特徴は、チャリティー活動に、よく誘ってくれたことです。私どもも何度も参加しました。特に奥さんたち、うちの家内は英語なんか全然できませんが、それでも、ご近所の方が誘ってくれました。

「何をやってるんだ」と聞いたら、ジャガイモの袋詰めや、何かちょっとした食事を用意したり、できることをやっていました。それでほとんど毎日、みるみるうちに女性の名前呼ぶんですよ、ファーストネームで。メリーだとか、エリーだとかいって、「きょうはベティと一緒によ」とか言うから、全然、どの人がベティかもわからないんですが、それでも、毎日活動を行っていました。そういうふうに、向こうの文化というのか、向こうのやり方、「いらっしやい、いらっしやい」と言われて行くと、何の違和感もなくとても温かく迎えてもらったという思い出がどんどんどんどん積み重なっていきました。だから、よかったなという気がするわけです。

もちろんジョージタウンだけではなく、ケンタッキーから3千人の方を雇いまして、あそこに大きな工場をつくって、それで男どもはそっちで自動車を一所懸命つくることをやっているわけですが、地元の方たち、そこにに入れていただいた家族はみんな大変優しく、すぐに分け隔てなくやっていただいたということを強く感じております。

例えば、日本人の女性が、地元のアメリカ人の奥さん方とジャガイモの袋詰めをやっている時に、おしゃべりをしているんだけど、ちゃんとジャガイモが袋に入ってるわけですね。それで、アメリカ人の女性が不思議がって、「何で日本人はお話ししながらやれるんだ。アメリカ人は話が始めると、手はお留守になっちゃうんだ」と言って、大変感心されたという、そんな話を色々聞きました。

男性も、です。私はすぐロータリークラブに入れられてまして、それでロータリークラブで毎週火曜日に集まっていた。初めから仲間に入れてもらうんですが、あそこは南部なまりがきついものだから、ものすごい聞き取りにくいんですけど、一所懸命中に入ってやっていました。やる前に必ず歌を歌って、それからアメリカの国旗に誓いの言葉を述べる。それはもう当たり前ですが、やるわけです。いつの間にか、もうアメリカ人みたいになっちゃう。最初から、そういうふうに使われます。ある時、やはり日本の政府とアメリカの政府と何か始まったんです。そしたら、僕の向かいにいるおじさんが、「大体日本はけしからん」とおちゃくちや文句を言い出して、それで聞いてたら、途中ではっと気がついたようです。「おっ。ミスター張、おれはおまえを日本人だとは



思っていないからな」と言うんです。要するに、みんな仲間だからということで、わいわいやっているっていうのが、とてもよかったです。

ロータリークラブでは、ケンタッキーは馬の州ということで、必ず年に1回ホースショーを行います。馬の州と言ってもは変ですが、サラブレッド、競馬の馬の産業が大変盛んなところなんです。そこでホースショーという馬のショーをやります。それを、ロータリークラブが主催してやりまして、そこで集まったお金を、例えば小児麻痺専門の病院に渡すとか、色々貧しい方のところへ持っていかとかそういうことをやるんですね。かなりのお金が集まりまして、そういうのも随分経験しました。

金集めてことになる、私どもは工場色々部品も買っていますから、日本から来たサプライヤーなどによく「出してくれ、出してくれ」と、ジョージタウン以外のところからみんなお金を集めて、そこでは、私は活躍できるわけですね。それで、実際にホースショーになると、毎年毎年もぎりをやるんですよ。3ドルぐらい払って、馬を連れて中に入っていく。来る年も来る年ももぎりで、あそこで3ドルもらって、領収書を書いて渡す。ほかは何をしているかという、ハンバーガー焼く人のチームと、それから場内整理とあるわけですね。場内整理は、人気があるし、ちょっと難しそうだし、英語がしっかりしゃべれなきゃいけない。だから、ハンバーグを焼くのは、おもしろそうだからっていうので、キャプテンに、「もうもぎりは何年もやったから、今度はハンバーグを焼くほうに行かせてくれ」と言ったんですが、「わかった、わかった」と言うだけで、ちっともやらせてくれない。結局、初めから終わりまでもぎりをしていました。

そういうふうにして、みんなで作るといのはなかなかいいし、勉強にもなりましたね。どうも私どもは、日本に帰ってきて反省しているのですが、例えば企業はお金だけ出す。それで、そのお金をまとめてどこかへ届ける。それで、チャリティーをやったつもりになるんだけど、向こうの人はちゃんと自分で全部やるんだというところがありまして、やはり建国以来そういう伝統があるんだろうと思います。とても勉強になりました。

皆様方、先ほど、国際交流協会の理事長さんも「多文化共生というのは一つの大事な柱だと思う」ということ言って

らっしゃいます。向こうへ行って、色々なことを失敗しましたし、結局何でこうなっちゃうんだらう、文化の違い、歴史の違いだなということその中に入って、少々痛い思いをしながら色々勉強してまいりました。

もう、皆様方に言っても、そんなことはわかっているよという話ばかりだと思いますが、一番気をつけなきゃいけないのは、言葉。英語というより、言葉がものすごく大切だということです。それなのに日本人は、言葉って余り大切にしていないですね。以心伝心とかね。察してもらうとか言ってしまう。

例えば、「最近、僕は全然金がない。金がないから土曜・日曜も一歩も外へ出られなかったから、近所のスーパーかコンビニで買って、三食ともサンドイッチとおにぎりで済ましたよ」なんてことを、もし言うと、普通言われた側は、何とかしてあげなきゃいけないと思う。これは日本人の気持ちですよね。それで、米国の秘書の女性にそう言われて、お金あげた日本人がいるんです。これもまた日本的に、ぼんつと金を渡さないで、そうすると恥ずかしいだろうからってうので、そっと机の中にお金を入れた。それがセクハラだというわけですね。お金を渡した、これは何だと大騒ぎになってしまいました。これは、極端な例でございますが、要するに、きちっと相手との会話というものを、ちゃんと意思に基づいてやらなきゃいけない、ということです。

私は釣りが好きですから、郡長の家に釣りに行った時に、最初、釣り道具屋で教わった釣り方は、ルアーでぼんと投げてこうやって引っ張ってということでした。アメリカのブラックバスというのは、それで釣れるというから、郡長の家の前の川でそれをやったけれど、ほかの人はみんなミミズつけて、やっているんですね。そして、そっちばかり釣れる。僕は、浮きもおもりも針も持っていないんです。こっちにはルアーしかないから。道具が全然違う。誰も何も言ってくれない。何て不親切な人だと思いました。けれど、30分か40分投げて僕は一匹も釣れない。ほかの人は、ぼこぼこぼこ釣れる。釣っている場所もちょうど違いますし。とうとうこっちから、「すまんけど、そのさおと糸を貸してもらえないか。僕のこれを投げたって全然こないから」と言いました。そしたら、それを待っていたんですね。「あっ。おまえこれでやるか」と言った途端に、郡長が「おれがつくってやる」と言って、どこからか自分のものを出して、全部仕掛け出す。僕は、もう長いこと釣りをやってるから、仕掛けなんかは自分でやるんですけど、全部郡長がやってくれて、ミミズまでつけてくれて。それから、今度は一番釣れるところへ行って、「そこ、どけどけ。張さん、ここが一番釣れるよ」と教えてくれました。一言、自分の意思を言うと、めちゃくちゃに親切になるけど、言わない間は、こちらも察してはいけません。あれは、後でわかりました。

そういうようなことで、言葉というのはすごく注意しなきゃいけない。社長が一番最初の挨拶で、「地元のジョージタウンを大切にします」と言っても、こんなものは社交辞令ですね、日本では。ところが、それを聞いたジョージタウン

の人は、すぐ明日からでも、もうドッと日本人が来て、色々なものを買ってくれるだろう、Welcome TOYOTAという感じで、店は飾るし、日本語を勉強に行ったりするわけです。そんなことは全然知らないから半年ぐらいたって、えらく怒られてきてね。一緒にいた人に、ジョージタウンではまだ工場も動いていないうちから、早く仕事をやらないかな、という感じがあったそうです。そして、その人が、我々が帰りの切符を旅行社に頼みに行ったら、旅行社の人が、「来た」と言ってもものすごく喜んで、「半年間日本語を一所懸命勉強したんだけど誰も来てくれなかった。やっと来てくれた」と。こっちのほうがそれを聞いてびっくりしました。うかつにも、いわゆる建前と本音とか社交辞令とか、そういう言い方をするとえらいことになるなというのを早々とあちこちで叱られながら覚えました。それから、言ったことは必ず実行するという、よく相手の意思を聞く。やりたいことはちゃちゃっと言う。ノーはノーできちっと言うということを気をつけてやりました。

最初は日本人ですから、「せっかく言ってきたことをノーというと、みんな傷つくんじゃないか」と思っていたんですが、だけど、アメリカ人と色々話していると、「構わないからノーはノーと言え」と言うので、恐る恐る「それはノーだ」と言うと、「わかった」とすぐ帰っちゃいますね。そういう意味では、言葉というのはとても大事だと思います。それで、僕は後から来たトヨタ自動車の日本人の人たちには、「話が大事なんだよ。日本みたいにその間がいっぱいあるわけではないんだ」ということをたくさんたくさん伝えました。日本と反対のことがいっぱいあります。

日本は、会社で人を育てます。しかし、アメリカでは自分で、色々な専門家になろうとして自分の時間で、自分のお金で経理の専門家とか、調達の専門家とかになって、それで入社試験を受けてきます。だから、入社を経理部長が決めたり、購買部長が決める。日本は、人事部が決めるので、色々な人材が混ざっています。いつも言うのですが、私は学校では一応法学部です、法律を勉強したのですが、入社して、トヨタ自動車は何に使ったかということ、結局、製造現場に入れて、現場の改善をさせたんですね。それで15年。僕は抵抗して、「技術屋ではないので、現場の改善なんかできません」と言いましたが、「そんなことは関係ない。無駄を見つけるだけだ」と現場に入れられて、それでよかったかどうかというとはまた別です。日本は入れて、特徴を見ながら色々なところをローテーションして、育てていくけれども、アメリカはもう経理は経理、人事は人事でその専門家でやります。だから国際交流協会の理事長の、この前亡くなられたお父様の豊田英二さんは、「ええか、アメリカは選ぶ国だよ。日本は育てる文化だぞ」と言われてきて、「なるほど。まさにそうだな」と感じられることを、たくさん勉強いたしました。これをお話していると、2時間ぐらいたっちゃいますが、いずれにいたしましても、アメリカに行って、それでいろんなことがわかるということと同じように、今、ブラジルを始め、日本に来ていらっしゃる方々が、今度は日本の和の文化、

こういうものがどこから来たんだろうということを多分お感じになっているだろうと思います。皆様方ととにかくお話をしながら、少しずつ理解を深めていくんじゃないか、とこんなふうに思います。時間が少し迫ってまいりまして、全く少し別なことを申し上げておきたいと思います。

実は、私はこちらへ帰ってきたのは1994年でございますが、5年後の1999年から社長を拝命いたしまして、それから色々なところで事業がどんどんどんどん広がりました。先程、申し上げましたように、この20年間で、売っているところは170、つくっているところは50幾つと、こういうことでございます。あちこちで、現地の責任者の方々、あるいは一緒に事業をやっている人たちとお話をして、仕事の話をして帰ってくるわけです。その時に、何となく感じたのは、普通の国と、特に日本に親しい、日本人に好意を持っている国というのがあるなということです。あっちこっち行っているうちに、です。

それで、どうしてなんだろうなと思いました。最初は台湾でございましたが、台湾の人たちというのは、大変違和感がない。日本語を話してくれる。それで価値観も大変似ているということで、特に日本に対して大変好意を持ってくださる方が多い。「どうしてだ」と聞いたら、「いや八田さんという方が、台湾で大きなダムをつくって、そこから水の管理ができたので、南部の地方は荒れ地がたちまち畑になりました。大変な大きな事業をして台湾に尽くしてくれました。八田さんの銅像もあります。そういう意味では、大変日本に対して感謝していますよ」ということで、八田さんという方の名前が出てきたんですね。それで、感心いたしまして、それまで私は知らなかったものですから。

それから、特に東南アジア、その辺の社長に、「今、行っている国で日本人が特に歴史上何かいいことをやったからとか、そういうことで残っていることを僕に報告してくれ」と言って、ずっと集めました。色々なものが出てまいりました。そして、そこから得た結論というのは、国同士で何かやっただからすごく友好関係が深まるということはないんじゃないかということです。むしろ、個人がいかにその国に尽くしたかということです。みんな個人の名前が残っているんですね。



皆さんもよくご存じの方が多いと思いますが、杉原千畝さんがビザを書いて、6千人のユダヤの方々を日本に来て、日本からオランダへ行くようにしてあげたとか、こういう意味では杉原さんのお名前がずっと残っていますよね。

それから、名前は残っていませんが、和歌山県の串本沖でトルコの軍艦であるエルトゥールル号が明治時代に座礁しました。その時は600人の方のうち500人が亡くなっただけですが、100人ほどを、串本の向かいの大島の方がみんな夜中に出て、私もその場所を見に行きましたけれど、2、30メートルあるかという断崖絶壁をでっかいトルコ人をおぶって、3人がかりで上へあげて、冷え切っている体をみんな暖めて助けてあげたというんです。その方たちをトルコに送り返しました。今でもエルトゥールル号のお話はトルコの教科書にも載っています。だから、トルコの人たちというのは、それ見て育つから、日本というのは本当にすばらしい国だというふうに思うわけです。あそこは多分世界で一番親日的なんじゃないですか。これも明治政府とか、大正の政府が出ていったということじゃなくて、やはり串本の人たちがトルコの兵隊さん、海軍の兵隊さんたちにそういうふうに接したということです。そういうのがたくさんあるので、私も本当に今興味を持って、あちこち行っております。

ベトナムのホー・チ・ミンさんの兄貴分と聞きましたが、ファン・ポイ・チャウという方がおられて、この方が何年ごろですかね、もちろん戦前ですが、昭和の初めか大正の終わりかですけれども、400人ぐらいのベトナムの若い人を組織して、日本に来て、ベトナムを近代化するために日本を勉強しようといっただけなんです。そういうことも、知りました。その方たちが日本に来て勉強しようとしたけれども、ベトナムは、当時、フランスの植民地だったからフランス政府から強硬な抗議がきて、日本政府がそれをやれないということで放り出してしまった。何百人ものベトナムの若い人たちを抱えてファン・ポイ・チャウさんは本当途方に暮れたらしいのですが、静岡県のお医者さんが、自分の私財を全部なげうって、その人たちをきちんと助けて、それでお国に帰るまでやってあげたというので、私、見に行きました。私は、色々見に行くんです。でっかい石のところに、感謝の言葉が掘ってあるんですね。常林寺という袋井のお寺です。ベトナムの大使が今でも、大使が交代すると必ずそこへまず行くんだそうです。何でその碑が立ったかという、ファン・ポイ・チャウさんが、ベトナムに帰って、事が成ってから、お礼のために来られた時には、もう既にそのお医者さんは亡くなっていました。本当にお世話になったというのでこの碑をつくったということでした。そういうふうにしてみると、一人ひとりがその国の人たちにやってあげることが、歴史上で見るとすごく大きな影響を与えるんだと強く思っております。

インドネシアでは、日本人が千人ぐらい残って、オランダから独立する時に、力になって一緒に戦ったり、それから軍隊を指導してくれたので、国家的英雄ということになっていますが、その戦争で多くの方が亡くなったと言われてい

戦争に負けてからも、日本に引き上げずに、現地に残って独立運動を一所懸命助けて、その場で700人の方が亡くなって、300人の方だけ残っていらっしゃいましたが、3年か4年前にちょうど偶然インドネシアの独立記念日に行ったら、そこに招かれている方が1人、その国家的英雄が1人だけ生きておられて、ジャカルタ新聞という日本語の新聞に書いてありましたよ。去年はだれだれさんと2人で来た。その時に「来年も一緒に来よう、と言ったけれども、残念ながらこの方が亡くなってしまったので、もう自分一人になった」と言われていました。もう90歳ぐらいの方ですかね。

そんなことで、やはり我々の先輩というのはすごいなという気がしますし、それは組織でやるとか、国家がやるという話とは全く違うなと思います。ここにいる皆様方のように、本当にボランティアで、国際交流をするということが大事です。他国の人たちに親切にしてあげるとか、あるいはお互いに文化の交流をするとか、こういうことがずっと心に残っています。それが広がっていくんだということを、そういうことをずっと集めてみて、私は勉強いたしました。個人で、できる範囲で一所懸命やるということはとても大切なことだと思っています。



こちらの場合は、個人というよりも団体ですね。大勢集まったら、もっとその力が大きくなってくだろうと思います。先程のご挨拶の中で、今1万3千人ぐらい外国の方がいらっしゃって、皆様方が色々手を差し伸べていただいて、この方たちが日本にいる間に、本当にあちこちぶつかるかもしれないけど、終わる時には「いい体験をした。いい国だったな」と思って帰れること。それはもう、皆様方の双肩にかかっているような気がいたします。このようにして帰った方たちがどんどんどんどん「日本はいい国だよ。我々は本当に

いい経験したよ」と言うことで、お一人の方が中心にならずと輪が広がっていくだろうなと思います。ですから、私も、外へ出て、それで一所懸命日本の良さを広めたり、日本の文化を理解してもらったり、あるいは現地の経済活動を高めるようなことを、これからも頑張ります。皆様方はこちらの中で、今度は外国から来られる方に対して、日本人の温かさ、あるいは、日本の文化を、ちょっと理解するのは難しいかもしれませんが、日本の文化の良さみたいなものをよく教えてあげていただきたいと思います。それも、やはり外と中と両方で国際化を進めていく。私は、両方とも豊田市の国際活動だと思っておりますので、これからもますますお忙しくなられるかもしれませんが、ぜひ頑張ってくださいと思います。

オリンピックが行われるのは東京です。けれども、きっと大勢の方が7年後にいらっしゃって、それでずっと色々な各地を回られると思います。おもてなしの心は、既に豊田市の場合はずっと前からやっていると思いますけれども、他方で昇龍道というんですか、ちょうどこの東海地区からズーッと石川県の能登半島に出ていくという観光が開発されていますので、そちらにもいらっしゃるんじゃないかなと思います。そうすると、まず起点が、名古屋や豊田からスタートということになってもらいたいなと期待しています。

どうぞ、私もこれから一所懸命、国際交流を頑張りますから、皆様方も中degがっちり進めていただきたいと思っています。

ちょうど時間になりましたので、これで私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました



国籍	人数	割合(%)
ブラジル	5,169	39.3
中国	2,761	21.0
韓国又は朝鮮	1,365	10.4
フィリピン	1,293	9.8
ペルー	674	5.1
タイ	348	2.6
ベトナム	328	2.5
インドネシア	318	2.4
その他60カ国)	910	6.9
総数(68カ国)	13,166	100
豊田市総人口	422,456	
外国人登録者数の割合(%)		3.12

2013年11月1日現在豊田市調べ

////// 編集後記 ////

「海外へ出ていくことだけがグローバル化ではなく、海外からお迎えする方もグローバル化である、豊田市では25年前から「おもてなし」をやっている」との張氏の言葉に、豊田でのおもてなしの一端を担っているTIAとして、とても嬉しく、また、これからの励みになりました。

10月1日の設立25周年記念講演会にご参加いただけなかった皆様にも、講演会の内容をお伝えしたく講演録としてお届けすることになりました。文字がいつもより少し多いですが、ぜひご一読ください(S)

2013年12月1日発行 (3,000部季刊)
 編集・発行 公益財団法人豊田市国際交流協会 (TIA)
 〒471-0034 豊田市小坂本町1-25 豊田産業文化センター3F
 TEL (0565) 33-5931 FAX (0565) 33-5950
 E-mail: tia@hm.aitai.ne.jp <月曜休館>
 [ホームページ] <http://www.tia.toyota.aichi.jp/>